

# 未来



全労協・郵政産業労働者  
ユニオン長崎中野支部  
機関紙・「みらい」  
NO. 3739  
17年3月21日(火)  
・Fax 095-828-1953

# 愚の東芝を滅ぼす会社と国を究明

おはようございます。

東芝が危ない。借金隠しの粉飾決算で、銀行団もかばいきれないからだ。株価も元値の二割に下落し、上場廃止や倒産も噂される。その悪行は東芝のドンと呼ばれた元社長西室泰三(前日本郵政の社長だが)に根がある。この西室は安倍首相派の財界人の代表で、そのことから東芝も最後は国(安倍)が守るといふ説もあるそうだ。

東芝は古く、日本の産業革命時にできた企業だ。歴史を振り返る。

日本の産業革命と資本主義の発生は幕末期である。

このとき徳川幕府は二六〇年間のいわゆる「鎖国」から開国へ向かう。

その契機が一八五三年(嘉永六年)で明治維新まで十五年のアメリカのペルー来航だ。

蒸気機関と鉄製大砲の軍艦が江戸湾に入り、江戸城を射程にして開港を迫る。幕府の老中筆頭の阿部正弘は、尊王攘夷論(外国撃退)論を押し切り、アメリカの親書を受け取り、一方、軍事的には品川の台場に大砲を備えた。このとき幕命で佐賀の鍋島藩が大砲五〇門を備えつけ、江戸の町を守った。

では当時、幕府すらもたなかった近代科学技術と兵器製造(鉄製大砲と蒸気船)を、西海の一小藩である佐賀藩がなぜ保有していたのか。

それには理由がある。佐賀藩は天領の長崎・出島の警護役で、外国との接点があり、西欧列強の



佐賀藩は長崎

アジア支配  
ニアヘン戦争での中国の敗戦などから、日本の危機を実感していた。

港の入り口の四郎が島(神の島)の先端で佐賀藩の領地である(に、鉄製大砲を十五門も独自の力で備えていた。このころ攘夷論者の長州藩と薩摩藩はイギリスと戦争し、街と軍艦を焼かれたことから、彼

私の力関係を知り、攘夷論から開国論へと転換する。

このとき日本で唯一の国際港だった長崎は、この佐賀藩の大砲・十五門のおかげで無傷だったし、江戸の町も佐賀藩が備えた鉄製大砲・五十門で守られた。軍事的に幕末の日本を救ったのは佐賀・鍋島藩と長崎人の先進的な蘭学力(近代兵器)であり、この神の島の砲台が幕末の日本を守ったともいえる。



開国の要求  
西欧列強の  
「横浜、兵庫(神戸)、長崎、函館などの四港開港に反対する。このとき将軍・

時間的にいえば、佐賀藩(城主は鍋島閔叟)は幕府よりも五年前に反射炉(溶鉱炉)を作り、日本製初の蒸気船と鉄製大砲を作り上げた。薩摩藩や伊豆の菰山の反射炉建設より二年以上古い記録が残る。

これは西洋科学(蘭学)を長崎の知識人たちに学び、先進的にとり入れた佐賀の蘭学者の力だった。日本初の蒸気船は佐賀藩が独力で作った凌風丸であり、産業革命の先頭を走った佐賀藩の力示す歴史の証人でもある。

まとめれば、日本の産業革命と近代化の波は、長崎に始まり、佐賀・鍋島藩の精練方(近代科学の部署)から始まり、開国は徳川幕府が行った。これが歴史だ。

明治維新は尊王攘夷論の志士の働きだと、司馬遼太郎などが歴史小説に書いているが、これは偉人伝説論なのだ。当時は吉田松陰も佐久間象山も、時代錯誤の外国撃退の攘夷論であり、国家主義論者であった。

その東芝だが、世界中が福島原発事故を受けて、再生エネルギーに転換する時代に原発依存外交の自民党とタッグを組み、赤字の根原の原発会社を買収する「ババ抜き」の赤字を抱えるきつかけとなった。

産業革命「エネルギー革命」時に会社を興し、世界的大企業となった東芝が、いままたそのエネルギー転換という新たな産業革命のとき、道を誤り、会社をつぶそうとしている。これはいよいよ東芝の問題ではなく、国の存亡もかかる重大事だ。原発が会社をつぶし、国の未来も危うくする。まさに現代の産業革命の転換点に私たちは立っている。

ともあれ、幕末という産業革命の嵐の中、いち早く近代化を成した佐賀藩と長崎の力で欧米列強の支配を受けずに、日本は国を開くことができた。国の危機を、長崎と佐賀が蘭学と近代化で守ったのだ。

ところでこの佐賀藩の精練

仲間と競争せず、弱い立場の人と共に団結して闘おう。

期間雇用社員の希望者全員の正社員化を。

めざせ、均等待遇

なくそう差別！

ユニオンは労基法裁判に勝利するぞ！

期間雇用パート労働者の皆さん! 困りごとは職場の郵政ユニオンへご相談を。

1 集-山本, 2 集-向井, 3 集-山田, 郵便-高田, ゆうちょ銀-上筋, 東-松岡, 他支部・分会の役員へ。